研究セミナー「ギュツラフと東・東南アジアにおけるプロテスタント布教」

倉田明子（アジ研特任研究員）

日時：2014 年 2 月 21 日（金）　15：00～17：00

場所：立教大学池袋キャンパス　12 号館 2 階　総研センター内会議室 1・2

1. はじめに

発表の機会をいただきありがとうございます。今日は、おもに中国で活躍したギュツラフという宣教師について、話題提供させていただきます。

ギュツラフ（Karl A. Gützlaff）という人は中国キリスト教史の分野では非常に有名ですが、彼について端的に述べた文章をまずご紹介したいと思います。

> *"A saint, a crank, a visionary, a true pioneer, and a deluded fanatic." The Protestant missionary Karl Gützlaff (1803-1851) was all of these – but he was also a maritime traveller of the first rank* ―― Desert Island Books

資料 1 にも挙げたリプリント版の *Journal of three voyages along the coast of China in 1831, 1832, & 1833* の裏表紙にある紹介文ですが、宣教師としての、また「海域学」にも関連する「航海者」としてのギュツラフの評価が示されていると思います。

今回はこの人物について詳しく紹介してゆきますが、その前にまず、私自身の研究関心についてお話しておきます。私は 19 世紀のプロテスタント布教の展開のあり方と、その過程で中国社会がキリスト教と西洋情報――キリスト教とともに入ってきた西洋のさまざまな情報――をどう受け止めたか、ということに関心を持っています。具体的には①太平天国とキリスト教のかかわりについて、また②アヘン戦争後に誕生した開港場でキリスト教を介して西洋知識を得た中国人知識人について、研究してきました。

今回お話するギュツラフは①にかかわる人物で、私自身は特にギュツラフがつくった福漢会が太平天国とどうかかわっていたのかということに関心を持っています。これからギュツラフ関係の資料を探しにヨーロッパに行き、研究を進めていこうと考えている段階ですので、今回の発表では先行研究および私がこれまで調べてきた周辺的な内容を整理してお話ししたいと思います。

2. 中国におけるプロテスタント布教の開始

では、本題に入っていきたいと思いますが、まずギュツラフが中国に現れる以前の中国のプロテスタント布教の状況を短くお話しておきたいと思います。

1）前史

中国でキリスト教といいますと、カトリックから異端とされたネストリウス派（景教）が中国に伝わったのが最初と言われます。7 世紀に伝来し、まもなく衰退したと言われています。その後、カトリックがまず元代の 13 世紀に伝播し、いったん衰退しますが、その後 16 世紀の明の時代にイエズス会の宣教師が中国に渡来し、明朝の上層部の人たちも含めてある程度広まっていきます。ところが清の時代、18 世紀には禁教となり、またここでいったん低調になっていきました。その後 1807 年に最初のプロテスタント宣教師でロンドン伝道会所属のモリソン

という人が中国に来て、ここからプロテスタント史が始まることになります。

プロテスタントそのものは 16 世紀に宗教改革によって誕生していましたが、カトリックとの対抗関係の中でプロテスタント教会を確立することに集中していて、当初海外布教はほとんどしていません。その後 18 世紀後半にプロテスタントの間で宗教復興運動が起こり、海外布教に展開してゆきます。ロンドン伝道会はこの流れの中で 1795 年に成立した海外布教のためのミッションでした。

2）草創期の中国プロテスタント布教

モリソン（Robert Morrison）

彼は 1807 年の 9 月にマカオに到着します。中国語を習いつつ聖書を翻訳するというのが彼の最初の任務でした。ただ、この時点でのモリソンは難しい立場にありました。当時外国貿易は広州だけに限定されており、しかも外国人は冬の貿易期間しか広州に滞在できない決まりになっていました。貿易期間以外の時期も中国近辺に滞在したい外国人はマカオに行かなければなりません。さらにイギリスは、中国貿易を独占していた東インド会社の社員しか広州に滞在できないという決まりを作っていました。宣教師という身分では広州に滞在できなかったということです。そのためモリソンは最初、アメリカ人商人の助けを得てアメリカ人のふりをして広州に行きます。しかし貿易期間が終わるとマカオに行かざるを得ないのですが、マカオはポルトガル領、つまりカトリックの地域で、プロテスタントの宣教師の居住は歓迎されませんでした。プロテスタント宣教師でなおかつイギリス人であるモリソンにとって、マカオも広州も非常に居心地の悪い場所だったということです。結局、長期間の居住は無理だということになり、いったん東南アジアの別な地域に拠点を設けることがほぼ決まるのですが、1809 年になって東インド会社が通訳としてモリソンを雇いたいと申し入れてきます。モリソンはこれを承諾し、東インド会社の通訳と宣教師を兼任する形でマカオ、広州に滞在できることになりました。

こうしてまず彼は聖書の翻訳を始めます。1813 年には新約聖書の翻訳が、19 年には旧約聖書の翻訳が完成し、23 年には英華辞典も完成、同年、新旧約聖書を合わせた完全な形での聖書——通称で「神天聖書」と呼ばれるもの——が刊行されました。またこの間、1814 年には最初の中国人信徒も獲得しています。

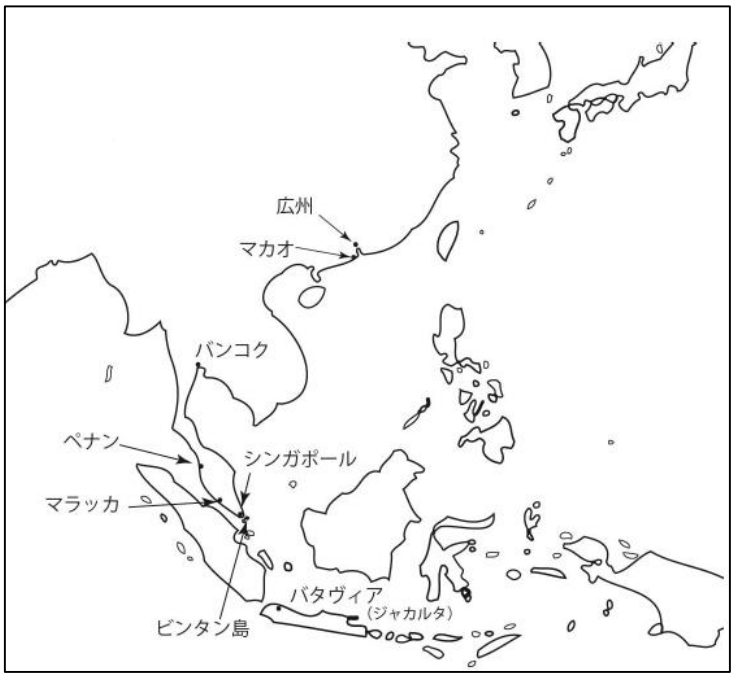

図 1

ミルン（William Milne）

モリソンの次に中国にやってきたのがミルンです。彼は 1813 年にマカオに到着しますが、やはりイギリス人であったため先ほど申し上げた事情により、マ

カオにも広州にも長期滞在できませんでした。そこで彼は間もなくマラッカに拠点を置き、そこで聖書の翻訳なども手伝うようになります。1820 年にはマラッカに欧米人の子どもと中国人の子どもを英語と中国語で教育する英華書院という学校もできています。ところが、ミルンは 1822 年には病気で亡くなってしまいます。

梁発

次に、初期のプロテスタント史で非常に重要な人物として梁発という人物を紹介しておきたいと思います。彼は中国人で最初の伝道者と言われる人です。1810 年ごろにはモリソンに雇われて印刷の仕事をしていましたが、ミルンとともにマラッカに行き、1816 年にミルンから洗礼を受けます。ミルンが 22 年に亡くなると再び広州に戻り、モリソンがこのときちょうど一時帰国をするタイミングだったこともあり、ロンドン伝道会の伝道師に任命されます。以後、梁発は基本的には広州の近辺で布教活動をしていまして、1832 年に「勧世良言」という本を書いています。これは中国語で書かれたキリスト教の布教書で、これが後々、太平天国運動を引き起こすきっかけになっていきます。

メドハースト（Walter Henry Medhurst）

それからもうひとり、メドハーストという人を挙げておきたいと思います。この人は 1817 年にマラッカに来た人物で、最初は印刷技術者として来るのですが、語学の才能があったこともあり、2 年後には正式な宣教師になっています。最初はマラッカにいましたが、以後、ペナンやバタヴィアに移り、そこで華僑に対して布教をしています。

これ以降、イギリス海峡植民地と言われるペナン、マラッカ、シンガポール、そしてオランダ領バタヴィアを拠点に、おもにロンドン伝道会からこの後アヘン戦争までに数名の宣教師が送られてきます。中国の開国を待ちつつ、おもに華僑に対して布教をしていました。英華書院も何代か校長を代えながら継続されています。

ブリッジマン（Elijah C. Bridgman）

最後にブリッジマンという人を挙げました。この人はアメリカン・ボードから派遣された、アメリカ人で最初の中国宣教師と言われる人で、1830 年にマカオにやってきます。マカオに拠点を置いて活動し、*Chinese Repository* という広州で発行されていた英語の雑誌を編集していたことでも有名です。

3. ギュツラフの生い立ち

以上が 1830 年ごろまでの状況になります。この後にいよいよギュツラフが中国沿岸にやってくるのですが、まず、簡単に彼の生い立ちをお話しておこうと思います。

ギュツラフは 1803 年、プロイセンの Pyritz の生まれで、職人の息子でした。8 歳でラテン語学校に入りますが、13 歳で、おそらく経済的な理由ではないかと言われていますが、学校をやめています。その後、職人になる訓練をしていましたが、あるとき友人と一緒にプロイセンの国王に詩を献上したところ、それが非常に喜ばれ、その褒章として勉学を続けられることになり、Berlin Mission Institute に奨学金付きで入学しました。

入学後に彼は劇的な回心を経験します。回心というのはキリスト教特有の言葉ですが、ある

ときに突然、でもはっきりと信仰的に変わる体験を指します。ギュツラフはこの回心の体験のあと、それまでは信仰的にはかなりクールであったのが、非常に熱心なクリスチャンになったそうです。これはギュツラフにとってはとても大きな体験でした。その後また、プロイセン国王の推薦があってオランダ伝道会に入ることになり、正式に宣教師への道に進むことになりました。1823 年の 6 月以降、3 年ほど、今度はオランダに移り、オランダ伝道会の神学校で勉強をします。そして 1826 年にオランダ植民地であったスマトラ島のパタク族への布教に派遣されることになります。これ以降、アジアでのギュツラフの活動が始まります。

4. 海のギュツラフ　――航海者としてのギュツラフ

1）東南アジアでの活動（1827-1831）

ギュツラフは 1827 年 1 月、バタヴィアに到着し、メドハーストの家に 4 か月間滞在して中国語や現地の言葉を学んでいます。メドハーストは当時すでに華僑伝道に携わっており、布教書を執筆してそれを配布する活動をしていました。ギュツラフはここでかなりメドハーストに感化され、インドネシアで現地の人に布教するよりも、中国人に対して布教をしたいという気持ちを持つようになります。そして華僑伝道について伝道会からも一応の許可を得たようで、スマトラ島ではなくビンタン島に行き、しばらく活動しています。

このころには彼は自分の中国名「郭實臘」を名乗り始めています。おそらく福建語読みで「ギュツラフ」に近い音を取っていると思いますが、中国人の名前としても成り立ちうる文字になっています。彼自身は、福建人の「郭」一族に加えてもらった、というようなことを言っています。どういう関係性なのかはよくわからないですが、郭姓の人物と知り合いになり、その一族の人間として認めてもらう、ということがあったのかと思います。

そしてギュツラフは、1828 年には華僑伝道に完全に転向するということを一方的に宣言し、オランダ伝道会の許可を得る前に、ロンドン伝道会のトムリンという宣教師と一緒にバンコクに行ってしまいます。そのため、公式的にはここでギュツラフはオランダ伝道会の宣教師をやめて独立宣教師になったとみなされます。ただ、実際にはその後も数年間はオランダ伝道会と報告のやり取りもしていますし、またある程度経済的な援助というのも継続していたそうです。

一方このころからギュツラフはロンドン伝道会とのかかわりが深くなっていきます。1829 年にマラッカの英華書院を管理するロンドン伝道会の宣教師が不在になり、ギュツラフが数カ月間その肩代わりをしたこともありました。そのときに、ロンドン伝道会のマリーという女性宣教師と結婚しています。こうしたこともあって、時々ギュツラフはロンドン伝道会の宣教師であるとする研究書も見受けますが、厳密にはギュツラフがロンドン伝道会に属していたことはありませんでした。

さて、ギュツラフはその後 3 年ほどバンコクで過ごしています。その間にトムリンとギュツラフの 2 人で新約聖書の福音書のうちの 2 つを翻訳し、また、マリー夫人はタイ語の辞典を作っているそうです。ギュツラフはまた、神学校時代に簡単な医療行為の訓練を受けており、ごく簡単なものであれば外科の手術できたそうで、医者としてもかなり活躍をしていたようです。医者として、中国人だけでなくシャム王室とも関係を構築していたと言われています。

また、コーチシナ（ベトナム）のほうに何度か船で行ったり、シンガポールでよく本を出版したりもしており、この間にかなり活発に東南アジアでも活動していたことが見えてきます。

2）中国沿岸の航海

その後、ギュツラフはいよいよ中国沿岸までやってきます。

最初の航海と、その後の２回分の航海について記した旅行記が、先ほど申し上げました *Journal of three voyages along the coast of China in 1831, 1832 & 1833, London,1834* です。

最初の航海は 1831 年 5 月から半年ほどの旅でした。中国に思い切って出掛けたきっかけとしては夫人の死ということもあったようですが、ともかく、中国商人の船に医者として、外国人としてはただ１人、乗り込みます。この商人たちは広東省の潮州の人たちだったようです。ルートは、**図２**にも載せていますが、潮州を経てさらに北上して天津まで行き、その後当時奉天と言われた遼寧省の錦州辺りまで行っています。そして再び南下しマカオに到る、というものでした。このルートは、広東・福建の商人たちの東南アジアから中国をめぐる貿易ルートで、毎年のように広東・福建の商人たちはこのルートで貿易をしていたようです。バンコクから出かけていますから、かなり長旅になるわけですが、これを中国商人の中に混じって、唯一の外国人として、身なりも完全に中国式にしてやり遂げています。

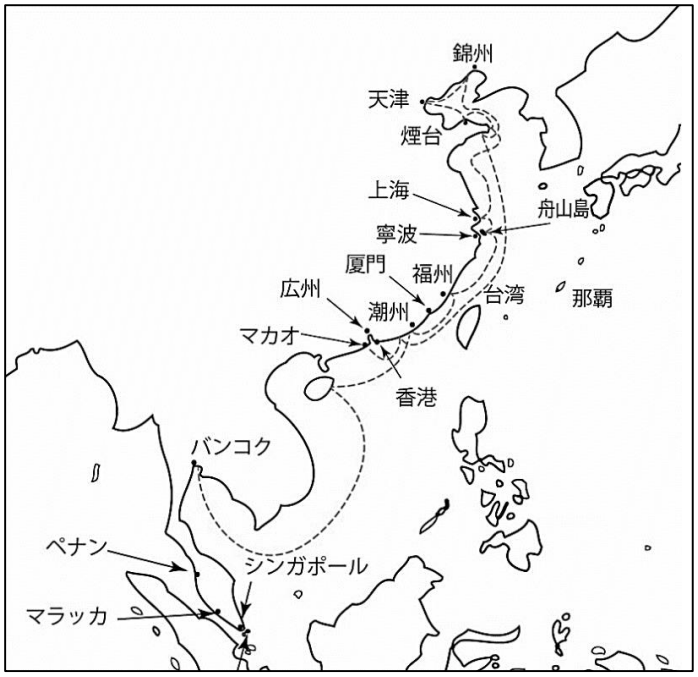

図２　ギュツラフの航海航路（1831 年 5 - 12 月）

ギュツラフは宣教師ですから、自分で書いた布教パンフレットを持参し、行く先々で配布していますが、中国には文字の書かれた紙や書物を尊ぶ伝統もありますので、かなり歓迎されている様子がうかがえます。また、簡単な医療行為を通して医者として非常に歓迎された様子も見えてきます。これが第１回目です。マカオまで来たギュツラフは、そこでモリソンに出会い、歓待を受けています。

その後、あまり時間を空けずに 1832 年の２月から９月にかけて、今度は東インド会社が貿易ルートを開拓するために派遣した調査船に通訳兼医者として乗り込み、再び航海に出ます（**図３**）。このときの航海の特色は朝鮮半島と琉球にも立ち寄った点にあります。これによってギュツラフは朝鮮半島と琉球で布教活動をした最初のプロテスタン

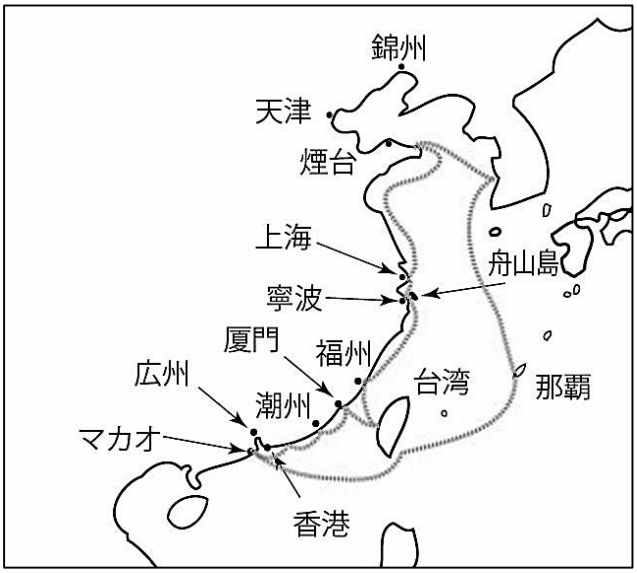

図３　ギュツラフの航海航路（1832 年 2 - 9 月）

ト宣教師、という言い方をされています。

朝鮮半島では現在の忠清南道（チュンチョンナムド）の舒川（ソチョン）にある小さな湾に浮かぶ島に上陸し、役人たちに貿易を打診する手紙を渡していますが、そのときにギュツラフは聖書や布教書も渡しています。ただし、これらは結局受け取りを拒否されており、ソウルの王府にも報告はあげられなかったといいます。琉球でもやはり役人たちに貿易を打診して断られていますが、ここでも聖書などを渡したようです。

これが 2 回目の航海です。その後 9 月にマカオに戻り、翌月にはまた航海に出ます。今度はジャーディン・マセソン社のアヘン密輸用の武装船での航海でした。福建から山東を通って、遼寧省の錦州のほうまで行っていますが、真冬なので氷漬けになり大変な目に遭うという冒険談が書かれています。

このジャーディン・マセソン社は、清朝から禁止されていたアヘン貿易をしていたイギリスの会社です。宣教師たちは基本的にアヘンには批判的な態度を取っていました。そのアヘンを密輸という形で売り歩く船に宣教師が乗って、しかも布教をするのはよろしくない、という意識は当然あったわけで、この旅行記でも、ギュツラフも最初かなり迷ったと書いています（ただしこの本には、それがアヘン貿易船だということは書いていません）。ギュツラフはこの当時すでに個人宣教師でしたので、収入が必要だという切実な問題がありました。これだけ立て続けに旅に出た背景にはそれが大きく働いていたと思います。ただ、結局のところ、アヘンの売買をする隣でキリスト教のパンフレットを配る、ということをしているわけで、後世、特に中国の人たちから、ギュツラフはこの点で非常に厳しい批判を受けているのも確かです。

しかし、これはギュツラフだけの問題とは言えません。ジャーディンやマセソンなどのアヘン商人たちは、宣教師たちに非常に協力的でした。ギュツラフの布教への熱意にも理解を示しており、この 3 回目の航海のときにはそれまでの 3 倍のパンフレットを積み込ませてもらえて、行く先々で配布できた、ということもありました。モリソンも、ギュツラフの 3 回目の航海に対して後押しをしていて、彼がたくさんの布教書を持って旅に出たことを喜ぶ記事なども手記に出てきます。この後も、例えばブリッジマンなどが中心になって教育や医療のためのファンドをつくるのですが、ジャーディンやマセソンやデント、といったアヘン商人たちがそこに出資をして理事になるということもありました。宣教師は中国人がアヘンを吸うということには厳しい態度をとりましたが、アヘン貿易に関してははっきり物を言いづらい状況があったように思います。

これ以後、ギュツラフは少なくとも 4 回はアヘンの密輸船に乗って航海をしているようですが、その航海にほかの宣教師が加わるということもありました。例えば 1835 年 3 月から 5 月にかけての航海にはアメリカン・ボードの宣教師スティーブンスが同行し、福建の閩江という福州に流れ込んでいる大きな川をさかのぼり、内地のお茶の産地を旅しています。

ただ、1834 年、35 年になってきますと、イギリスと清朝の関係が悪化したことと、それからギュツラフがそれまでところ構わず布教書を配布し続けていたことによって、布教に対する清朝の取り締まりが厳しくなってきます。1835 年の航海中には福建の地方官に告発されて取り締まられる事件も起こっていました。そして配布された書物に中国国内で印刷したと書いてあったため、マカオや広州でも取り締まりがあって逮捕者を出すというかなり深刻な事態になります。そのため 1835 年の夏以降は、広州やマカオで布教書を印刷したり配布したりできなくなり、これ以降は沿海での布教はほぼ不可能になっていきます。これによって、ギュツラフの

航海者としての日々は終わりに向かうことになります。

3）モリソン号事件

ギュツラフの航海としてはもう一つ、モリソン号による江戸訪問があります（**図４**）。1835 年の終わりごろ、遭難して生き残った尾張出身の音吉、岩吉、久吉の 3 人がアメリカの太平洋岸に漂流するという事件が起こります。助けられた 3 人はマカオまで送り帰され、ギュツラフの家にしばらく滞在し、日本への送還を待ちました。このときにギュツラフは彼らから日本語を習い、聖書の日本語訳を試みています。1837 年、この 3 人と、薩摩からフィリピンに流された 4 人の漂流民の計 7 人がアメリカのモリソン号で江戸に送還されます。しかし江戸で打ち払らわれ、その後薩摩でも打ち払われてしまい、結局この 7 人は日本には帰れずにマカオに引き返すことになりました。いわゆるモリソン号事件です。このモリソン号にギュツラフも乗っておりましたので、江戸と薩摩まで、船の上ですが来ていることになります。なお、この 7 人の日本人は、日本に帰れなくなった後、中国で自活してゆくことになりますが、岩吉と久吉の 2 人はギュツラフのもとに残り、助手として働いています。

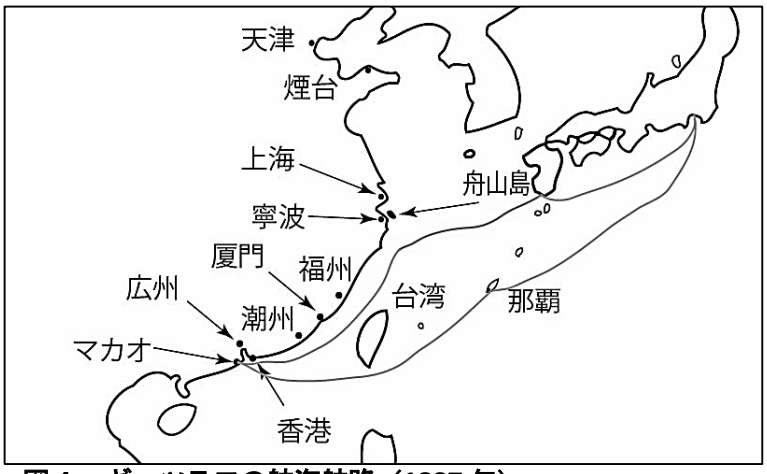

図４　ギュツラフの航海航路（1837 年）

以上が海とかかわりを持っていた時代のギュツラフです。

5. 陸のギュツラフ

1）官僚への道

こうして航海者としてのギュツラフの時代が終わっていきますが、それはギュツラフが官僚になっていく時期でもありました。

1834 年 8 月、イギリス東インド会社は中国の貿易独占権を失い、イギリス政府から派遣された貿易監督官が直接中国との貿易を管理する体制に変わりました。初代貿易監督官のネーピア卿は、東インド会社の通訳だったモリソンを引き続き自分の主席通訳に任命するのですが、そのわずか数日後、交渉のために訪れた広州でモリソンは病気になり、急死してしまいます。その後、主席通訳の職は息子のジョン・モリソンに引き継がれました。もともとジョンは次席の通訳だったのですが、彼が主席通訳になったために次席通訳のポストが空き、1834 年 12 月、ギュツラフがオファーを受けてこのポストに就任することになります。

その後、イギリスは清朝とアヘン戦争（1840-42）を戦うことになります。ギュツラフも情報収集や交渉の通訳をし、時にはみずから交渉にあたることもあったそうです。また、この戦争の中で一時期イギリスが舟山島を占領しますが（**図５**）、その際にはギュツラフが行政官を務めています。この間に夫人（再婚）が学校を開いたり、ロンドン伝道会の医師ロックハートを招いて病院を開いたりと、布教にかかわることもしています。1842 年の南京条約の締結にも

立ち会っており、清朝の官僚に聖書を配ったという話も残っています。

1842 年 9 月から翌年 8 月まで再びイギリスは舟山島を占領しますが、その間ギュツラフが行政官に復帰しています。しかし 1843 年 8 月にジョン・モリソンが病気で亡くなってしまい、ギュツラフが貿易監督官の中国語書記という身分を受け継ぐことになり、以後彼は香港で暮らすことになります。したがって、ここで航海者としてのギュツラフの時代は終わります。

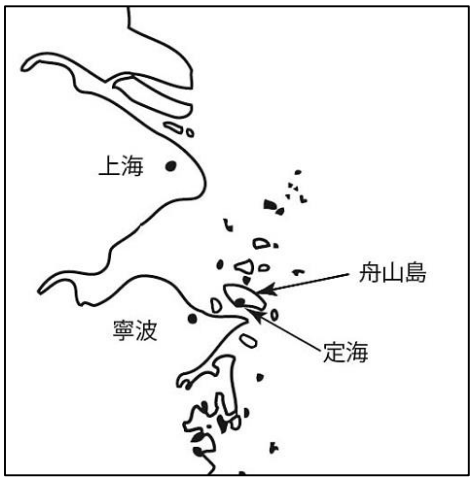

図５

2）福漢会（Chinese Union）

ここで一度、キリスト教布教の話に戻りたいと思います。ギュツラフ以外のほかの宣教師の多くは、開港後、広州、上海、寧波などの開港場に教会を建て、学校や病院を開くなどして直接布教を展開していきます。ところが、ギュツラフは自分が官僚になってしまって忙しいこともあったのか、少し異なる布教の方法を考えます。それは宣教師が中国人伝道者を育成し、育成した中国人たちを内地に派遣するというスタイルで中国の内陸部にキリスト教を広めるというものでした。ギュツラフは、宣教師が直接布教することには障害が多いと考えていました。言葉を学ぶのも大変ですし、学んでも病気になったり、死んでしまったりする宣教師も少なくなく、むしろ中国人が自ら布教するほうがよい、また、神学を学んだ牧師としての宣教師よりも、知識はなくても現地人の信徒のほうが新しい信者を効果的に獲得している、と感じていたようです。こうして 1844 年、そのための組織として香港で福漢会が創設されました。

福漢会は、組織としては会員と伝道師の 2 ランクに分かれており、会員になるには聖書に出てくる十戒と使徒信条という信仰告白の暗記が必要とされ、さらに 60 人以上を洗礼に導くと伝道師になる、というシステムでした。訓練を受けた後、布教書や聖書を携えて内地に派遣されますが、基本的にはそれぞれの故郷に行く場合が多かったようです。そこで書物の配布や布教をし、終わったら香港に帰ってきて報告をする。その報告と引き換えに報酬をもらうという流れでした。発足時には 21 人だったメンバーは 4 年後には 1300 人を超えており、かなり急激に発展しています。広東省の各地に布教基地を置き、そこを拠点に広西省、江西省、福建省など布教活動が行われていたようです。1846 年には福漢会を援助するためにスイスのバーゼル伝道会とドイツのレニッシュ伝道会が宣教師を派遣します。こうして急発展をしたわけですが、その陰で「ライスクリスチャン」と言われる問題が出てきます。信仰によってではなく、報酬をもらうためにキリスト教徒になり布教活動をしている連中がいる、という批判が寄せられるようになります。実際、虚偽の報告をしてお金をもらう、あるいは報酬でアヘンを買っている、といったこともあったようです。

ちょうどこの頃、1850 年から翌年にかけてギュツラフはヨーロッパとアメリカを旅行し、福漢会の宣伝活動をするのですが、そのあいだに香港では福漢会の問題が暴露されていくことになります。ギュツラフを援助しているはずのバーゼル伝道会の宣教師たちが内部報告を出して告発したり、またロンドン伝道会の宣教師が猛烈な非難を行ったりということが起こり、結局、バーゼル・レニッシュ両伝道会の宣教師たちが福漢会のメンバーを整理し、「劣悪」メンバーを

追放してしまいます。

1851 年の最初にギュツラフは香港に戻り、新たな協力者としてベルリン伝道会の宣教師も連れて来ていましたが、バーゼル・レニッシュ両伝道会は福漢会との決別を宣言し、独自に布教していくことになります。しかも同年 8 月、ギュツラフが病気で急死し、福漢会は、その後何年か続いてはいくのですが、急速に勢力をなくしてしまいました。

ただ、福漢会に属していた中国人信徒が全員問題ありだったかというと、そうではなく、バーゼル・レニッシュ両伝道会はもちろん、その他多くの伝道会のスタッフとして核心的なメンバーになっていく人もいました。実態にせよ、影響にせよ、福漢会が実際どれほどのものだったか、ということはまだ明らかになっていないことが多いように思います。

6.「愛漢者」ギュツラフ

1）執筆活動

次に、ギュツラフの文筆活動について見ておきたいと思います。「愛漢者」というのは、中国では「号」といいますが、ペンネームのようなものです。中国語で書物を書く際に使っていました。中国を愛する者という、ギュツラフらしいペンネームと言えるかもしれません。彼は生涯で中国語、欧文書など合わせて 50 種以上の本を執筆しています。例えば代表作のひとつに『贖罪之道伝』というものがありますが、これなどは序文の最後に「道光十四年（1834)、厦門人郭實臘」と署名してあります。一見外国人とは分からないような書き方ですが、これが後々問題になり、清朝から取り締まりを受ける原因にもなります。

このほかギュツラフは、キリスト教に限らず西洋情報の伝達の面でも活躍しており、月刊紙の『東西洋行毎月統紀伝』も発行していました。これは 1830 年代に出ていたもので、欧米の地理情報やニュースが紹介されていました。それらの情報を再編集して『古今万国綱鑑』『万国史伝』といった地理書も出版されています。

2）聖書翻訳

また、やはり聖書翻訳の分野でのギュツラフの役割は非常に大きいと思います。タイ語の「ルカによる福音書」と「ヨハネによる福音書」、また日本語の「約翰福音之伝」――「ハジマリニカシコイモノゴザル」で始まることでも有名ですが――など、中国語以外の言語の聖書翻訳もしています。日本のキリスト教史の中でもやはり最初の聖書の翻訳者として、ギュツラフの名前はしばしば挙げられます。

そして中国語訳聖書の歴史の中でも、ギュツラフはひとつの独自のバージョンを作りあげています。中国語では文体がとても重要になるのですが、ギュツラフ訳聖書の文体は「浅文理」の聖書と呼ばれます。「文理」とは文語体のことで、すなわち浅い、堅苦しくない文語体ということになります。

中国語訳聖書の歴史については**図 6** もご参照ください。最初にモリソン・ミルン訳の「神天聖書」ができますが、これはまだ中国語としてこなれておらず、とても分かりにくいものでした。そこで、モリソンの息子のジョン・モリソン、それにブリッジマン、ギュツラフ、メドハーストという 4 人で 1835 年に改訂版を出します。しかしその後もまだ改訂が必要だということで、開港後に中国本土にやって来た宣教師たちはメドハースト、ブリッジマンを中心として 10 人前後はいたのですが、彼らが開港場ごとに分担しながら再改訂を進めていくことになりま

す。ところが、ギュツラフだけはこれに参加していません。

いっぽう再改訂に携わった宣教師の間ではその後、用語論争というのが起きてしまいます。最大の論争は “GOD”を「上帝」と訳すか、「神」と訳すかという議論だったのですが、これが神学論争も絡む大論争となり、結局宣教師たちは分裂します。メドハーストたちのイギリス宣教師派とブジッジマンを中心とするアメリカ宣教師派に分かれ、メドハーストたちのバージョンが「代表訳本」と呼ばれる聖書になります。「上帝」を採用したバージョンで、文体としてはきわめて完成度の高い文語体になります。ブリッジマンたちのバージョンは、途中まで一緒に翻訳していますので文体の面では似ていますが、“GOD”を「神」と訳しています。なお、日本には最初にこのアメリカバージョンの漢訳聖書が入ってきて、日本語聖書に影響を与えたとも言われています。

この後、全体の流れとしては、20 世紀に入る頃には「代表訳本」があまりに文語的過ぎるという批判が出て、あらたなバージョンとして「和合本」ができます。和合本は文語のものと、官話――いわゆる口語――のものがあり、後者の方は今でも使用されています。ただ、「和合本」作成の過程でも「上帝」か「神」か、という論争に決着はつかず、やはり両方のバージョンが出されています。

この聖書翻訳の流れの中で見ますと、ギュツラフはかなり早い段階からひとりで独自の改訂を行っていたことが分かります。ギュツラフ訳聖書はおもに福漢会が発行していましたので、福漢会聖書とも呼ばれます。用語論争の関連で言えば、ギュツラフは「上帝」を採用していますが、文体の面では非常に平易で明快であると言われます。代表訳本が知識人向けの高度な文

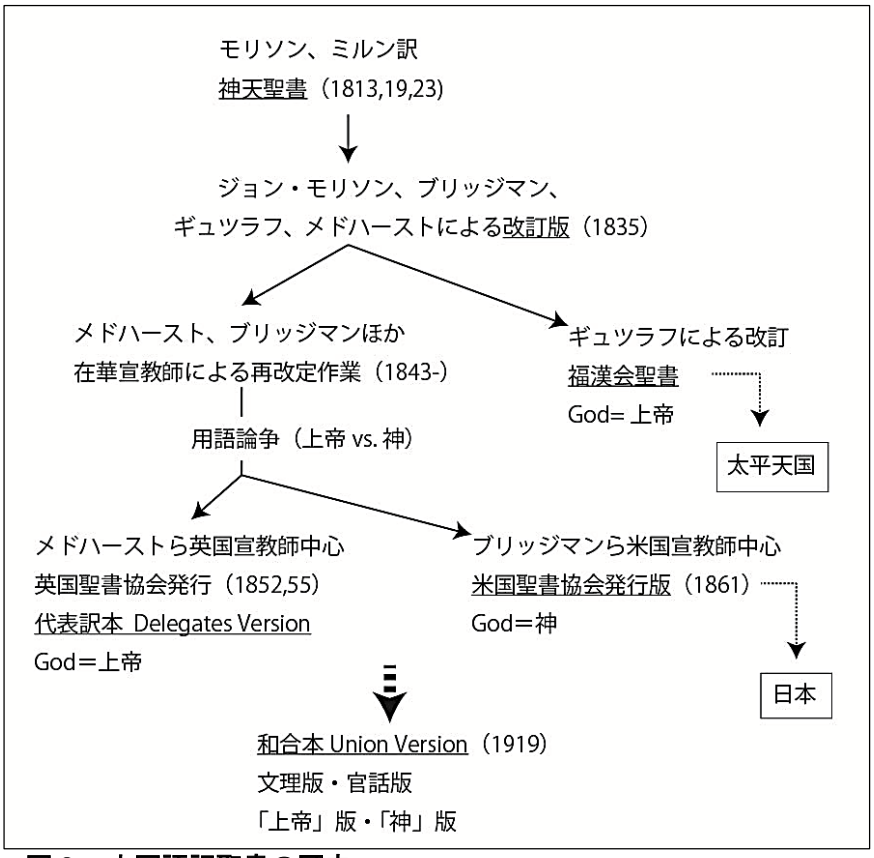

図６　中国語訳聖書の歴史

語体であるのに対し、ギュツラフ訳は小説のような、やや口語に近い文体で大衆向けであるというような評価です。このギュツラフ訳聖書は太平天国でも受容されていて、その点でも重要な意味を持つことになります。

7. おわりに

1）航海者ギュツラフ

以上、ギュツラフについて見て参りましたが、最後にいくつか論点を挙げながらまとめていきたいと思います。まず、航海者としてのギュツラフですが、やはり彼の経歴からして、中国沿海布教のパイオニアと言えると思います。ギュツラフは中国沿海だけではなく、東南アジア、朝鮮半島、琉球、また日本など、さまざまなところで最初にやって来た、あるいは何らかの影響を及ぼした宣教師として記憶されています。

ただ、アヘン密輸船に乗ったという点では、後に批判を受けることにもなります。これに対して、少し後になってきますと、宣教師の中にはアヘン密輸船ではない船で布教旅行をする動きも出てくることになりますが、それは一方でギュツラフの布教旅行が効果的だったからでもありました。しかし彼らが1830年代前半にかなり大胆に大量の聖書や布教書を配布した結果、35年頃から取り締まりが厳しくなってしまい、沿岸での布教旅行は下火になってゆきます。

2）中国文化との距離

また、ギュツラフは布教相手の文化との関係ということでは、徹底して現地化しようとするスタンスだったと言えると思います。中国商人の中に混じって、いわば中国人の一人として旅をすることができた人でした。これはかなり珍しいことだったと思います。この当時のほかの宣教師、例えばモリソンやブリッジマンなどは、むしろ欧米的な文化や生活とキリスト教は不可分であるという発想を持っていたました。ですから、彼らは欧米的な生活スタイルの中に使用人や助手として雇っている中国人を引き入れ、その中でキリスト教を伝えるスタイルでした。実はモリソンの場合は、当初、ギュツラフのように完全な現地化を試みましたが、病気になってしまう、という経験をしています。その意味では、ギュツラフは現地化を試み、なおかつそれをやってのけた人、と言えるかもしれません。ただギュツラフも、生活面での現地化の姿勢はその後徐々に薄れているように思います。

3）布教の手法

プロテスタント伝来からアヘン戦争までの時期は文書伝道が主でしたが、開港後、ギュツラフ以外の宣教師たちのほとんどは、教会や学校、病院などを建てて直接的に布教するスタイルになっていきます。一方ギュツラフの場合は、開港後、福漢会の創設という方向に進みます。中国人信徒による布教に重きが置かれており、教会を形成すること、あるいは学校や病院を建てることにはあまり関心は向けられていません。ただギュツラフも福漢会の中で監督者として宣教師が果たす役割は重視しており、やはり中国人メンバーを指導する存在として宣教師は位置づけられていました。

また、ギュツラフの中では、西洋文明がキリスト教とともに広められ、未開の世界を文明化してゆく、といういわゆる「文明化の使命」的な意識は非常に強かったと思います。例えば海外情勢を紹介する文章のなかで、キリスト教国こそが発展する、という歴史観はかなりはっき

り打ち出されています。

それから福漢会については、毀誉褒貶がありますが、中国人による中国人への広範囲での布教活動が展開したことは事実です。私の関心から言いますと、太平天国運動とも深く関わっていた可能性があります。福漢会の広西省での活動範囲と、太平天国の母体となった上帝教の拡大地域が重なっていたり、また実際に福漢会のメンバーが太平天国に参加していたり、ということがありますし、また太平天国が発行した聖書が福漢会バージョンの聖書を底本にしているということもあります。今後福漢会と太平天国の具体的な接点を探っていけたらと思っています。

4）翻訳観

宣教師の翻訳観の違いを明らかにした用語論争ですが、根底にあったのはやはり読みやすさをめぐる議論だったと思います。モリソンは、中国語として多少おかしくても原文に忠実にあるべき、という発想でしたが、メドハーストは洗練された中国語を追求しました。そうでなければ中国では読んですらもらえない、という現実も確かにありました。ですからメドハーストは完璧な文語体を目指すのですが、ギュツラフは文体上はそこまでは求めませんでした。むしろ、自分の伝えたい「福音」――キリスト教の中身――が「明快」に伝わることを最重要視するスタンスであったと思います。

ただ、「伝えること」を最重要視するこの姿勢は、のちのキリスト教を受容した人間についてもその信仰の真偽の判断は下さない、という態度にもつながっているかもしれません。この時期、ほかの宣教師たちは入信希望者に対してかなり厳しい人物審査をし、入信後も信徒としてふさわしいかどうか、厳しく見ていました。そうした宣教師たちから見れば、ギュツラフの中国人信徒への態度はきわめて「寛容」でした。福漢会をめぐる論争や「ライスクリスチャン」の問題の背景にはこうした信徒観の違いもあったのではないかと思います。

5）後世への影響

最後にギュツラフの後世への影響ですが、一番よく言われるのが、ハドソン・テーラーが 1865 年につくった中国内地会への影響です。この内地会というのは、宣教師が中国の服装をして奥地に出かけていって布教することを主眼とした、教会をつくることよりも布教することに重きを置いていた団体です。19 世紀の末から 20 世紀の前半に活発に活動しましたが、宣教師の現地化の姿勢や布教スタンスの中に、確かにギュツラフに通じるものがあったように思います。

冒頭のギュツラフの紹介文にもあったように、彼は時に狂信的とも思える熱心さで、批判も受けながらもキリスト教布教に打ち込んだ人物だったと言えると思います。少しまとまりに欠けますが、ギュツラフという人物のご紹介をさせていただきました。どうもありがとうございました。

参考文献

Gützlaff, Karl, *Journal of three voyages along the coast of China in 1831, 1832, &1833,* London: Frederick Westley and A H Davis, 1834 (reprint: Desert Island Books, 2002)

Lutz, Jessie G., *Opening China, Karl F. A. Gützlaff and Sino-Western Relations, 1827-1852*, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 2008

Wylie, Alexander, *Memories of Protestant Missionaries to the Chinese,* Shanghai Presbyterian Press, 1867

李志剛『基督教早期在華伝教史』台湾商務印書館、1985年。

倉田明子「中国における初期プロテスタント布教の歴史 ――宣教師の「異教徒」との出会いを通して――」、『アジア文化研究』35号、国際基督教大学アジア文化研究所、2009年3月、pp.93-110。

春名徹『にっぽん音吉漂流記』晶文社、1979 年。